Journal of Asian and African Studies, No.44, 1992

パンジャービー語の分詞のiã語尾

岡口　典雄
(アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員)

The iã Endings of Panjabi Participles

OKAGUCHI, Norio
Institute for the study of Languages and Cultures
of Asia and Africa, Joint Researcher

1　はじめに
2　分詞の用法
3　用例の整理
4　まとめ
資料と参考文献

1　はじめに

近代インド・アーリア諸語の中でパンジャービー語は性・数・格に関する名詞と動詞の一致という点で大きな特徴を持っている。動詞が未完了分詞・完了分詞・未来形でその主語が主格形の場合または動詞が不定詞・完了分詞でその目的語が主格形の場合，動詞もā, e, ī, ĩãと，呼応する主格形の名詞の性・数に応じた主格形の語尾変化をする。一方，後置格形の語尾変化e, ĩã, ī, ĩãは，動詞では分詞においてのみ出現し，不定詞の後置格形は主格語尾の長母音が消失した鼻子音語尾ṇまたはnとなる。

分詞の後置格形のうちĩã語尾形については後置詞を伴った場合の本来の用法以外にも出現し，パンジャービー語の語尾変化の大きな特徴の1つになっている。しかし各文法書には，副詞句の例などとして断片的に示されているにとどまり，このĩã語尾形に注目し，その選択基準などに及ぶような解説は見当たらない。小稿では現代標準パンジャービー語の文法の不確定の部分を埋める作業の手始めとして，まず学校用教科書を中心にその用例を検索整理し，その選択の原則を探ってみることにしたい。

2　分詞の用法

2．1　パンジャービー語の分詞の用法は，次の4種に分類される。

(I)名詞的用法……直後に後置詞を伴う名詞として用いられる。

(II)形容詞的用法……名詞を修飾する形容詞として用いられる。

(III)補語としての用法…主語や目的語の動作や状態を補う補語として用いられる。

(IV)副詞的用法……主動詞を修飾する副詞として用いられる。

2．2　パンジャービー語の分詞は，主語または被修飾語の性・数・格に応じて形容詞変化する。パンジャービー語の形容詞は語尾がā(ã)のもの(辞書の見出し語)のみ変化し，その他の形容詞は不変化である。したがって動詞の語幹にdāを付加した未完了分詞と，規則変化・不規則変化ともに語尾がāとなる完了分詞の語尾変化はā語尾の形容詞の語尾変化と

一致する。āで終わる形容詞の語尾は次のように変化する。

	男性単数	男性複数	女性単数	女性複数
主格	ā	e	ī	ĩã̃
後置格	e	iã̃	ī	ĩã̃

変化形の最終語尾は，ā, e, ī, ã̃の母音のいずれかである。語尾変化の音韻上の特徴は，女性複数形と男性複数後置格形が独立して存在し，それぞれī及びiとã̃の組み合わせによって形成されることである。

3 用例の整理

3．1 分詞の（I）名詞的用法（II）形容詞的用法におけるiã̃語尾形は，ā語尾の名詞及び形容詞と同じく，後置詞を伴う場合の男性複数後置格形として用いられる。

(I)sāhamaṇe *baiṭʰiã̃* cõ ikka ne uttara dittā. (TM,p.109)
正面に座っていた者たちの中から１人が答えた。

jo loka saṃsāra wica *tapadiã̃* nũ̃ ṭʰārana te śã̃tī waratāuṇa āũde hana uhanã̃ nũ̃ asĩ̃ amana-dūta kahiṃde hana. (N8, p.87)

この世で苦痛に燃える人々を冷まし鎮めにやって来る人々を，私たちは平和の使いと言っている。

(II) anaṃdapura de kilhe wica muǧalã̃ viruddʰa *laṛadiã̃* sikkʰã̃ nũ̃ kaī mahīne bīta gae. (MS, p.7)

アナンドプルの城にたて籠りムガルに抗戦していたスィックたちに，数カ月の時が流れた。

3．2 (IV) 副詞的用法のうち特定の助詞hīや不変化詞binã̃と結びついて独立した副詞句を形成する場合，分詞はその動作主（意味上の主語）の性・数・格に関係なく男性後置格形の(A)単数形e語尾，または(B)複数形iã̃語尾となる。これらの副詞句においては，(A)男性単数後置格形のe語尾の用例は稀で，ほとんどは(B)男性複数後置格形のiã̃語尾となっている。

【未完了分詞 hī】①「……するやいなや」「……するとすぐ」 ②「……しているまま」

(A)① uhanã̃ ne salāha baṇā laī ki roṭī laiṇa gae cora nũ̃ *āũde* hī māra dittā jāwe. (N3, p.37)

彼らは，パンを取りに行った泥棒たちを，戻ったらすぐ殺してしまおうと企んだ。

(B)① *āũdiã̃* hī uhanã̃ ne tāṛa tāṛa golĩã̃ calāuṇĩã̃ śurū kara dittĩã̃. (N2, p.17)

来るやいなや，彼らは鋭い音をたてて発砲し始めた。

baiṭʰadiã̃ hī ikka cora kahiṇa laggā. (N3, p.36)

座るやいなや，一人の泥棒が言い出した。

rātĩ *āũdiã̃* hī ihanã̃ mainũ̃ kihā ki savere sabʰa tõ pahilã̃ piṃḍa wālĩã̃ nũ̃ milã̃gā. (N3, p.65)

夜やって来るやいなや，朝まず最初に村人たちに会おうとこの方は私に言った。

(B)② uhanã̃ māsūma śera puttarã̃ nũ̃ *jīũdiã̃* hī kaṃdʰã̃ wica ciṇawā dittā giā. (N2, p.94)

その罪のない王子たちは生きたまま壁に埋め込まれてしまった。

【binã̃ 完了分詞】 「……しないで」

(A) bākī dī fauja nũ̃ binã̃ kujʰa *dasse* alavidā kahi ke... (AP, p.28)

残りの軍隊には何も言わず別れを告げて……

(B) ūṭʰa kaī kaī dina binã̃ pāṇī *pītiã̃* ate binã̃ kujʰa *kʰādʰiã̃* sāra laīdā hai. (N2, p.56)

ラクダは何日もの間，水も飲まず何も食べずにやっていけます。

viddiāsāgara jī ne binã̃ hora dera *kītiã̃* ākʰiā. (N4, p.67)

ヴィディアーサーガル氏は間髪を入れず言った。

uttʰõ binã̃ gʰara de daraśana *karāiã̃* usa dī fauja nũ̃ baramā te usa tõ agge malāiā bʰeja dittā giā. (KS, p.111)

そこから親元に帰されることもなく，彼の

軍隊はビルマそしてさらに遠くマラヤへと送られた。

3．3 さて，前後に特定の語を伴わない，分詞のみの用法では，どのような条件の場合に男性複数後置格形のiã語尾となるのであろうか。この条件を導き出すために，分詞が動作主の性・数に呼応する場合をまず示してみよう。

(III) (IV)における分詞は，分詞の動作主(意味上の主語) が主格形である場合は，その性・数に応じて変化する。

まず，(III)補語としての用法の分詞は(1)主格補語と(2)目的補語の2種に分けられる。

(1)主動詞（述語動詞）が自動詞で，主語の動作や状態を補う主格補語として分詞が用いられるとき，分詞の動作主（意味上の主語）は，主格形で示されている主動詞の動作主と一致している。したがって主格補語としての分詞は，主格形である文の主語の性・数に応じて変化する。

pʰira waḍḍā sārā iṃjaṇa *āūdā* disiā. (N2, p.74)

そして大きな機関車がやって来るのが見えた。

paṃja cʰe hirana parhã̃ *baiṭʰe* arāma *karade* disade sana. (N2, p.110)

5，6頭の鹿が遠くに座って休んでいるのが見えていた。

(2)主動詞（述語動詞）が他動詞（主として知覚動詞または使役動詞）で目的語をとり，目的語の動作や状態を補う目的補語として分詞が用いられるとき，分詞の動作主（意味上の主語）は，主格形または能格形で示されている主動詞の動作主ではなく，先行する目的語である。

目的語が主格形である場合は，目的補語としての分詞はその性・数に応じて変化する。

pʰira raṃga baraṃgīã̃ ciṛīã̃ cĩ̃ cĩ̃ *karadīã̃* dekʰīã̃. (N2, p.111)

そしていろいろな雀たちがさえずっているのを見た。

次に（IV）副詞的用法とは，分詞が主動詞を修飾する副詞の働きをするもので，分詞の動作主（意味上の主語）が主動詞の主語と一致し，主格形である場合は，その性・数に応じて変化する。副詞的用法の分詞は①単独では「～して」「～しながら」の意味となり，②反復して用いられると，継続の意味が加わり「～し続けて」「～しているうちに」の意味になる。

① bacce *ḍarade* bāhara naṭṭʰaṇage. (N2, p.39)

子供たちは恐れて外へ逃げるだろう。

agalī savera piṃḍã̃ dā sarapaṃca te paṃca nawĩ̃ paī miṭṭī utte *turade* waḍḍī saṛaka walla jā rahe sana. (N2, p.22)

翌朝，村のサルパンチ［村議会の長］とパンチ［村会議員］たちは，新しく敷かれた土の上を歩いて大通りの方へ向かっていた。

piṃḍa dīã̃ galīã̃ wicõ gabbʰarū pahilawānã̃ wã̃ga *lalakārade* nikala āe. (N2, p.21)

村の路地から，若者たちがレスラーのように雄叫びを上げながら出て来た。

gaḍḍī cʰaka cʰaka *karadī* turana laga paī. (N2, p.75)

汽車はシュッシュッと音をたてながら進み始めた。

"bāpū jī, basa tã̃ baṛe hicakole *kʰãdī* caladī hai." (N2, p.75)

「お父さん，バスはずいぶん揺れながら進むよ。」

② billī *uḍīkadī uḍīkadī* tʰakka gaī. (N1, p.50)

猫は待ち続けてくたびれてしまった。

turade turade uha tʰakka gae. (N3, p.37)

歩き続けて彼らはくたびれてしまった。

iho fikara *karadā karadā* uha bimāra pai giā. (N3, p.8)

こんな心配をし続けて彼は病気になってしまった。

socadā socadā uha gūṛhī nĩda saũ giā. (N4, p.17)

考えているうちに彼はぐっすり眠り込んでしまった。

また（IV）副詞的用法では，分詞の動作主である主格形の主語が前後の文脈から判断でき，主語としては示されず省略されている場合もある。その場合も分詞は省略されている主格形の主語の性・数に応じて変化する。

（　）内は省略されている主格形の主語である。

(tusĩ) *laṛade jʰagaṛade* ikalle ikalle rahe tã̃ tuhāḍā hāla aṭṭī de ikalle ikalle dʰāge wālā hoegā. (N3, p.9)

（おまえたちが）いがみ合って独り独りでいるなら，おまえたちは糸かせの１本１本の糸のようなものだろう。

(asĩ) *wekʰade wekʰade* galĩ guã̃ḍʰa de paṃdarã̃ vīha muṃḍe, kuṛīã̃ sattʰa wica kaṭṭʰe ho gae. (N3, p.30)

（私たちが）見ているうちに，近所の路地の20人近くの少年少女たちが集会場に集まった。

以上をまとめると，「動作主が主格形の場合に原則として分詞はその性・数に応じて変化する」と言える。

３．４　さて，ここから本稿の中心となる(III)補語及び(IV)副詞的用法の分詞のiã̃語尾について検討してみよう。

まず（IV）副詞的用法では，動作主が代名詞でなく名詞の主格形で，分詞の直後にくる場合は，動作主が主格形であっても形容詞的用法とはっきり区別するためにiã̃語尾となることもある。

isa tarhã̃ *gāũdiã̃* bacce ikallī ikallī muṭṭʰī cukade gae. (N3, p.32)

こんなふうに歌いながら，子供たちは１人１人握りこぶしをあげていた。

この用例を原則通り主格形の主語の性・数に呼応させ，次のようにe語尾形にすると，（II）形容詞的用法とも判断される。

isa tarhã̃ *gāũde* bacce ikallī ikallī muṭṭʰī cukade gae.

こんなふうに歌っている子供たちは１人１人握りこぶしをあげていた。

こうした原則通りの用例はかえって曖昧な表現となってしまうと言えよう。

cīkã̃ *mārade* loka iddʰara uddʰara dauṛe. (N2, p.17)

悲鳴をあげる人々はあちこち逃げ回った。
←（II）形容詞的用法

悲鳴をあげて人々はあちこち逃げ回った。
←（IV）副詞的用法

３．５　以上検討した用例は，原則に反するあくまでも特殊な場合である。分詞がiã̃語尾となる例のほとんどは，（III）（IV）の用法における分詞の動作主（意味上の主語）が主格形でない場合，つまり「動作主が主格形の場合に分詞はその性・数に応じて変化する」という原則に反する場合である。

主格形でない場合とは次の４つの場合に分けられる。

(a)目的格←（III）補語としての用法
(b)属格　←（IV）副詞的用法
(c)能格　←（IV）副詞的用法
(d)与格　←（IV）副詞的用法

それぞれの場合について用例を示し，検討してみよう。

(a)　分詞の動作主が主動詞の動作主とは一致せず，別に文中に示されているが，主格形でなく目的格形の場合

（III）補語としての用法の分詞のうち(2)目的補語としての分詞は，その動作主が主格形をとる場合と目的格形をとる場合がある。動作主が目的格形すなわち【後置格形＋nũ】をとる場合，分詞は動作主である目的語の性・数に関係なく常に男性複数後置格形のiã̃語尾

となる。

1人称と2人称の代名詞には,【後置格形＋nũ】に1語で相当する統合形がある。

代名詞の統合形

	単数	複数
1人称	mainũ	sānũ
2人称	tainũ	tuhānũ

口語体では3人称も統合形となり，単数では【後置格形＋nũ】でなく【主格形＋nũ】の統合形となることもある。

	単数		複数
3人称	isanũ	ihanũ	inhãnũ
	usanũ	uhanũ	unhãnũ

usa ne āpaṇe mittara de puttarã nũ kʰeta *puṭadiã* takkiā. (N3, p.11)

彼は自分の友人の息子たちが畑を掘っているのを見た。

uhanã nũ iṃña ucce uḍḍe *jãdiã* dekʰa ke loka baṛe hairāna huṃde sana. (N3, p.43)

彼らがこんなに高く飛んでいるのを見て，人々はとても驚いた。

ḍākū nũ iṃña *karadiã* wekʰa ke sādʰū ne pʰira kihā. (N4, p.9)

盗賊がこうしているのを見て，サードゥー［苦行者］はまた言った。

(b) 分詞の動作主が主動詞の動作主とは一致せず，別に文中に示されているが，主格形でなく属格形の場合

主格主語構文において副詞として働く分詞は，その動作主（意味上の主語）が主動詞の主語と一致する場合は，その性・数に応じて変化する。しかし一致せず異なる場合は，分詞の主語は属格の男性単数後置格形すなわち【後置格形＋de】で示し，分詞は動作主である属格形の名詞または代名詞の性・数に関係なく常に男性複数後置格形のiã語尾となる。

1人称と2人称の代名詞には,【後置格形＋de】に1語で相当する統合形がある。

代名詞の統合形

	単数	複数
1人称	mere	sāḍe
2人称	tere	tuhāḍe

口語体では3人称も統合形となり，単数では【後置格形＋de】でなく【主格形＋de】の統合形となることもある。

	単数		複数
3人称	isade	ihade	inhãde
	usade	uhade	unhãde

tere *huṃdiã* tã bijalī nahĩ sī āī para tere jāṇa picchõ agale hī sāla bijalī ā gaī sī. (N2, p.27)

きみがいた頃は電気は来ていなかったけれど，きみが行った後，次の年に電気が来たのです。

ise kārana anāṛī sawāra ūṭʰa de *uṭṭʰadiã*, usa dī piṭṭʰa tõ kapāha dī borī wãga zamĩna te ḍigga paīdī hana. (N2, p.57)

このため，素人の乗り手はラクダが立ち上がると，その背中から綿の袋のように地面に落ちてしまう。

mere *wekʰadiã* *wekʰadiã* usa ne āpaṇī mailī te pāṭī hoī cādara dī kaṃnĩ kʰolha ke usa wicõ ikka gʰasamaile raṃga dī poṭalī kaḍʰī. (NS, p.227)

私が見ているうちに，彼は汚れ破れた被布の縁を開けて中から土色の小包を1つ取り出した。

(c) 分詞の動作主が主動詞の動作主と一致し，この共通の主語が主格形でなく能格形の場合

主動詞が他動詞の完了分詞であるとき，主動詞の動作主（意味上の主語）は主格ではなく，能格の形をとる。主語が3人称の場合は，さらに後置詞neを伴う（ただしこのneは省略可能)。能格形は1人称と2人称の複数のみ独自の形をとるが，1人称と2人称の単数では主格形と，3人称ではすべて後置格形と同じである。

代名詞の能格形

	単数	複数

1人称	maĩ	asã̃
2人称	tũ̃	tusã̃
3人称	isa	ihanã̃
	usa	uhanã̃

分詞は主動詞を修飾する副詞として働いているため，当然，分詞の動作主は，能格形で示されている主動詞の動作主と一致している。しかしこの共通の動作主が主格形でなく能格形であるため，分詞は動作主である能格主語の性・数に関係なく常に男性複数後置格形のiã̃語尾となる。

usa ne lakkaṛahāre nũ̃ tiṃne hī kuhāṛe *pʰaṛāũdiã̃* ākʰiā. (N2, p.14)

彼はきこりに斧を3本ともつかませて言った。

dādī aṃmã̃ ne razāī ṭʰīka *karadiã̃* te nīṭū nũ̃ āpaṇī hikka nāla *gʰuṭadiã̃* kihā. (N2, p. 91)

おばあちゃんは布団を整え，ニートゥーを抱きしめながら言った。

patanī ne *ḍaradiã̃ ḍaradiã̃* kihā. (N3, p.88)

妻は恐る恐る言った。

gurū jī ne *musakarāũdiã̃* maradāne nũ̃ samajʰāiā. (N3, p.108)

グル・ジー［導師様］は微笑みながらマルダーナーに説いた。

sādʰū ne uhanã̃ walla iśārā *karadiã̃* kihā. (N4, p.7)

サードゥー［苦行者］はそれらの方を指し示しながら言った。

muṃḍe ne kujʰa *jʰijakadiã̃* kihā. (N4, p. 68)

少年は少しためらいながら言った。

(d) 分詞の動作主が主動詞の動作主と一致し，この共通の主語が主格形でなく与格形の場合

特定の主動詞が表層構造においては主格形の主語を有しているが，深層構造においてはこの【主格形の名詞＋主動詞】が全体として述語となり，その動作主（意味上の主語）がさらに【後置格形＋nũ̃】で示される構文がある。この【後置格形＋nũ̃】は，表層的には(a)の目的格形と一致するが，まったく性質の異なるものであるため言語学上「与格」形と呼んで区別している。そこで，この【後置格形＋nũ̃】を用いた構文は，主格主語構文に対して与格主語構文と呼ばれる。与格主語構文の表す内容は多様であるが，例としては，①感情の状態や変化，②生理の変化，③時間の経過，④所要時間などをあげておく。分詞は主動詞を修飾する副詞として働いているため，当然，分詞の動作主は，与格形で示されている主動詞の動作主と一致している。しかしこの共通の動作主が主格形でなく与格形であるため，分詞は動作主である能格主語の性・数に関係なく常に男性複数後置格形のiã̃語尾となる。

① “para tere mũ̃ha ca āpaṇā sira *pāũdiã̃* mainũ̃ baṛā ḍara lagadā e. (JK, p.50)

「けれど，あなたの口の中に頭を入れるのが私はとても恐いのです。」

bacciã̃ nũ̃ gʰara *baiṭʰiã̃* tasavīrã̃ rāhī̃ desã̃ paradesã̃ dī saira karāuṇa laga paī. (N3, p. 56)

子供たちは家にいながらにして写真によって国内や外国の旅行をしている気がしてきた。

② sarapaṃca nũ̃ kahī *wāhuṃdiã̃* muṛhakā ā giā. (N2, p.21)

サルパンチ［村議会の長］は鍬をふるって耕すうちに汗をかいた。

③ huṇa uhanã̃ nũ̃ *uḍadiã̃ uḍadiã̃* kāfī cira ho giā sī. (N3, p.43)

さて，彼らが飛んでいるうちに随分時間が経っていた。

④ uhanã̃ nũ̃ rāha te miṭṭī *pāũdiã̃ karadiã̃* baṛā cira lagga jāṇā e. (N3, p.21)

彼らが道に土を入れるにはかなり時間がかかる。

(IV) 副詞的用法における(b)(c)(d)の場合，分詞の動作主が前後の文脈から判断でき，主語としては示されず省略されている場合もあ

る。その場合も分詞はその動作主の性・数に関係なく常に男性複数後置格形のiã語尾となる。（　　）内は省略されている意味上の主語である。

(b)mātā agge (usa de) jʰūṭʰa *boladiã̃* usa dā dila ḍara jã̃dā. (BG, p.14)

母の前で（彼が）嘘をつくと，彼の心は恐れおののく。

(dādī aṃmã̃ de) iha *dasadiã̃* dādī aṃmã̃ dīã̃ akkʰã̃ wica haṃjʰū ā gae. (N2, p.94)

（おばあちゃんが）こう言うと，おばあちゃんの目には涙が出てきた。

(c) bʰaiṇa jī pʰira hassa pae. uhanũ̃ piāra *diṃdiã̃* (bʰaiṇa jī ne) bole. (N3, p.5)

お姉さんはまた笑った。彼女を慈しみながら（お姉さんは）話した。

(d) darawāze wicõ *laṃgʰadiã̃* (sānũ̃) srī harimaṃḍara sāhiba de daraśana hoe. (N2, p. 64)

門を通って（私たちは）ハリ・マンディル・サーヒブの参拝をした。

4　まとめ

ここまで整理検討した範囲の用例からわかる原則をまとめてみよう。

パンジャービー語の分詞は次の場合にiã語尾をとる。

（I）名詞的用法……男性複数後置格形の名詞として用いられる場合

（II）形容詞的用法……男性複数後置格形の形容詞として用いられる場合

（III）補語としての用法…目的補語として用いられ，その動作主が目的格形をとる場合

（IV）副詞的用法……(1)特定の助詞hīや不変化詞binã̃と結びついて独立した副詞句を形成する場合(2)動作主が主格形でない場合

以上が本稿の目的とした分詞のiã語尾選択のおおまかな原則である。(IV)副詞的用法については，(1)ではe語尾をとる用例，(2)では動作主が主格形の場合であっても分詞がその性・数に応じて変化しない用例も稀に見られる。3．2や3．4で検討した以外の用例もさらに検索し，iã語尾選択が任意性の強いものなのか，あるいはさらに細分化された条件があるのかを検討していく作業が必要である。

※パンジャービー語の表記には，グルムキー文字を機械的に転写したものを用いた。グルムキー文字とその転写文字との関係は下の表に示す。転写文字はシュワーの削除や特定の文字の声調は表記していない。グルムキー文字とパンジャービー語の発音との関係については，入門書の文字と発音の解説等を参照されたい。

ਅ a	ਆ ā	ਇ i	ਈ ī	ਉ u
ਊ ū	ਏ e	ਐ ai	ਓ o	ਔ au
ਅਂ aṃ	ਅੰ ã	ਆਂ ã̃	ਸ sa	ਹ ha
ਕ ka	ਖ kʰa	ਗ ga	ਘ gʰa	ਙ ṅa
ਚ ca	ਛ cʰa	ਜ ja	ਝ jʰa	ਞ ña
ਟ ṭa	ਠ ṭʰa	ਡ ḍa	ਢ ḍʰa	ਣ ṇa
ਤ ta	ਥ tʰa	ਦ da	ਧ dʰa	ਨ na
ਪ pa	ਫ pʰa	ਬ ba	ਭ bʰa	ਮ ma
ਯ ya	ਰ ra	ਲ la	ਵ wa,va	ੜ ṛa
ਸ਼ śa	ਖ਼ xa	ਗ਼ ǧa	ਜ਼ za	ਫ਼ fa

資料と参考文献
パンジャービー語資料

用例として使用した資料の略号とその頁は各用例の終わりに示してある。略号で示した書名と発行者及び発行年は次の通りである。個人の作品集については（作者）を示したが，教科書（N）や複数の作家の作品集（KS）については（作者）は省略した。

（略号）〝書名〞，（作者），発行者，発行年

(N1) **"Navīn Paṃjābī Pustak : pahilī śreṇī laī", Paṃjābī Skūl Sikkʰiā Boraḍ,** 1983

(N2) **"Navīn Paṃjābī Pustak : dūjī śreṇī laī", Paṃjābī Skūl Sikkʰiā Boraḍ,** 1983

(N3) **"Navīn Paṃjābī Pustak : tījī śreṇī laī", Paṃjābī Skūl Sikkʰiā Boraḍ,** 1983

(N4) **"Navīn Paṃjābī Pustak : cautʰī śreṇī laī", Paṃjābī Skūl Sikkʰiā Boraḍ,** 1983

(N8) **"Navīn Paṃjābī Pustak : aṭṭʰavī śreṇī laī", Paṃjābī Skūl Sikkʰiā Boraḍ,** 1983

(KS) **"Katʰā-sarovar", Paṃjāb Yūnīvarasiṭī Pablīkeśan Bioro,** 1972

(NS) **"Merīã kahāṇīã", (Nānak Siṃgʰ), Lok Sāhit Prakāśan,** 1973

(AP) **"Ikk udās kitāb", (Aṃmritā Prītam), Nāgmaṇī Prakāśan,** 1976

(MS) **"Mahān Sikkʰ yodʰe", (Śamśer Siṃgʰ), Māḍaran Sāhitt Akaiḍamī,** 1981

(BG) **"Bāpū Gãdʰī", (Kartār Siṃgʰ Cāvlā), Kastūlī Lāl aīḍ Saṃnz,** 1982

(JK) **"Jātak katʰāwã", (Kriśan Kãt), Sāhit Sarovar,** 1983

(TM) **"Tur gae mahik luṭāe", (Gurdiāl Siṃgʰ Pʰul), Pablīkeśan Biūro Paṃjābī Yūnīvarasiṭī,** 1983

参考文献

Linguistic Survey of India; Vol. IX Part I, G.A. Grierson, Motilal Banarsidass, 1916, Reprint 1968

A Reference Grammar of Punjabi, H.S. Gill & H.A. Gleason Jr., Department of Linguistics; Punjabi University: Patiala, 1969

Teach Yourself Books; Punjabi, C. Shackle, Hodder & Stoughton, 1972

Teach Yourself Panjabi, Hardev Bahri, Publication Bureau, Panjabi University: Patiala, 1973

Asian and African Grammatical Manual No. 13 e; PANJABI, Tomio Mizokami, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa; Tokyo University of Foreign Studies, 1981

The Panjabi language, N.I. Tolstaya, Routlegde & Kegan Paul, 1981

Syntax of Apabʰraṃśa, Ram Adhar Singh, Simant Publications, 1980

Verb Morphology in Middle Indo-Aryan, Ravi Prakash, Munshiram Manoharlal Publishers, 1975

"Paṃjābī Bʰāśā dā Vikās", Dunī Caṃdra, Paṃjāb Yūnīvarasiṭī Pablīkeśan Biuro : Caṃḍīgaṛh, 1959

"Paṃjābī Bʰāśā dā Viākaraṇ", Dunī Caṃdra, Paṃjāb Yūnīvarasiṭī Pablīkeśan Biuro : Caṃḍīgaṛh, 1964

"Bʰāśā Vigiān te Paṃjābī Bʰāśā", Harkīrat Siṃgʰ, Ujjal Siṃgʰ Bāhrī, Bāhrī Pablīkeśanz : Caṃḍīgaṛh, 1973

"Paṃjābī Bʰāśā dā Picʰokaṛ", Prem Prakāś Siṃgʰ, Paipsū Buk Ḍīpū : Paṭiālā, 1976